

この前にインドに旅した時もそうであったけれど、インドと付きものになっている象が割合いいの国で見られなかった。

シルクロードに沿う八カ国の旅といえは、誰でもすぐラクダとキヤラバンという連想が浮ぶ。だが冬に近い北京の街に物資を運んでくるほどの数を見ることは、まずむずかしいようであった。

西パキスタンから一日がかりで有名なカイバル峠を車で越えた。十一月初旬の風景は、アフガニスタンのカブールへ着くまで、実に秋深い山道の旅愁が身に沁みる思いであった。

その登り切つて国境に近くなる二股みちの分かれめに大きな標識が建ててあり、左半分にラクダが二頭、右半分に自動車が一輛描いてある。すなわち左はむかしのキヤラバン路、右は今の舗装した自動車道路の意味なのである。

岩山ではあるけれど、暗く左右に聳えている峡谷の中の一すじの路、ドロ柳が黄葉して茂りを見せている。この行く手に建てられた道標の絵文字、キヤラバンの路は山の深く重なる方へ入つてゆくようであった。

私たちの一行数人以外に、人ひとりいるのでもないこの山路。もちろんラクダなどの姿は見られなかったけれど、今ここをキヤラバンの一行が、あの山の奥へ過ぎ去つたかのような幻想にとらわれて、しばらくこの道標の奥を見やりながら佇つていた。

二日ほどの後、カブールを朝早く発つて、バミアンというヒンズークシユ山脈に抱かれた峡谷にある世界最大の石仏を尋ねた。往きにも帰りにも、人けのない山の中で、ラクダには何ぞか出逢つた。行き違いながら振りかえつて見ると、ラクダも首をのびして物かげからわれわれの方を見ていた。沈黙のけものラクダの人なつっこさは何ともあわれであった。

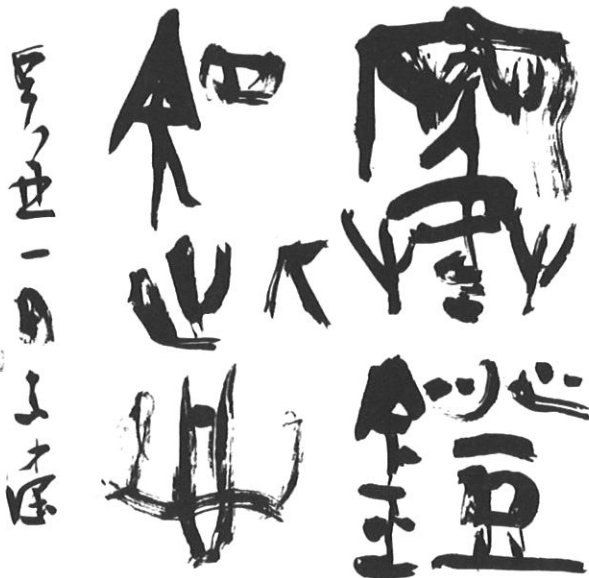
またガンダーラのスツーパーの跡を訪ね、人なつこいパキスタン北

境の少年たちから、野バラの実に似た木の実をもらつたりして、高い丘から下りて来たところで、向こうの山から下りてきたラクダの列と行き違つた。

薪の小枝を背から左右に一ぱい着けて、まるで糞虫のような姿で前方以外に見るすべもないようだが、信じきつたものの足どりで静かに遠ざかつて行つた。おもしろく忘れがたい一シーンで、心の乾板に焼き付いている。(つづく)

〈「たかむら」、昭和四十二年三・五月〉

『筆間雑記』中村素堂隨筆集(昭和六十三年刊)より転載。



『寒燈知此心』昭和48年